

# 「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

## ～ポーランドと日本の「絆」②ポーランド人を救った歌「さくら」～

立ち上がったその青年名はイエジ・エトシャウコフスキ。  
1939年9月1日、ナチスドイツがポーランドに侵攻したことをきっかけに始まった第二次世界大戦。

それを受け、ポーランドの青年、イエジはすぐに勇士をつのって、ナチスドイツに対して、レジスタンス（抵抗）運動を開始します。イエジの名をとって「イエジキ（イエジの子どもたち）部隊」と呼ばれました。



日本で食事を振る舞われるポーランド人孤児たち

イエジキ部隊は、もともと彼らが面倒を見てきた孤児たちや、新たな戦禍で親を失った戦災孤児たちも続々と参加し、やがて1万人を数える大きな組織になります。しかし、これをナチス当局が放っておくはずがありません。

ある日、イエジキ部隊が隠れ家として使っていた孤児院に、ドイツ兵が押し入り、強制捜査を始めたのです。

この時、青年イエジが助けを求めたのは………日本大使館でした。

急報を受けて駆け付けた日本大使館の井上益太郎書記官は、ドイツ兵に毅然と言いました。

「ここは日本大使館が保護している孤児院です。同盟国ドイツといえども、勝手な捜査は認められません。」  
しかし、ドイツ兵も簡単には引き下がりません。

「我々は信頼に足る情報に基づいて捜査を行っている。

たとえ日本国大使館の申し出であっても、容認できない。お引き取りください。」

すると、井上書記官は、イエジたちに言いました。

「君たち、このドイツ人たちに、日本と君たちの信頼の証として、日本の歌を聞かせてやってくれないか」  
イエジたちが日本語で「さくら」を大合唱すると、ドイツ兵たちは呆気にとられ、渋々立ち去りました。

ドイツ兵は、日本がこの孤児院を保護しているのはどうやら本当のことだと感じ、同盟国である日本への配慮から手を出さなかったのでしょうか。

さて、ここで注目すべきは、なぜ、イエジたちは、日本の歌を歌えたのかということです。

実は…イエジたちは…日本赤十字社がシベリアから救出し、つかの間でしたが日本で生活した、あの孤児たちだったのです！

かつての孤児たちはたくましく成長し、ナチスドイツの侵攻に断固NO!と、レジスタンス活動を開始したのです。

そして…彼らは20年たっても、日本の歌を歌い継いでくれたのです。

『人生に悩んだら『日本史』に聞こう』白駒 妃登美&ひすい ことろう（祥伝社）

優しい心（校訓でもある「忠恕」の心）は、相手のこのころの一番深いところに響くのですね。それは20年たっても消えることはないんですね・・・2022年11月7日、首都ワルシャワにある日本大使公邸にポーランド政府高官や地元マスコミなど、約200人が集まった。ここにいる人たちの多くは、いわゆる「ポーランド孤児」の子孫たち。「きょう招待されて、とてもうれしい。日本は私たちにとって大事な国で、私たちの先祖を助けてくれた。そのおかげで私たちは今ここにいることができる。」



受け継がれる人道支援の精神  
ポーランド孤児救出100年

1995年7月、阪神・淡路大震災が発生した年の夏休み、遠く離れたポーランドに被災児童30人が招かれました。さらに翌年も、前年とは別の被災児童が30人。渡航・滞在費用はすべて、ポーランドの個人、企業、滞在先の市行政などが負担し、ポーランドに到着した児童たちは、3週間にわたり各地で温かい歓待を受けました。それは、日本が行った、ポーランド人孤児救済に対する“恩返し”（「恩送り」）でした。

・・・優しい心（校訓でもある「忠恕」の心）は、100年たっても消えることはないんですね。

前号でも紹介しましたが、裏面は、2023. 3. 15の神戸新聞の朝刊です。

